Title	会計情報の比較可能性に関するモデル分析					
Sub Title	Analysis for comparability of accounting information					
Author	Analysis for comparability of accounting information 荒田, 映子(Arata, Eiko)					
Publisher	「元山, 峡」(Alala, Liko) 慶應義塾大学					
Publication year	2022					
Jtitle						
JaLC DOI						
	★ 研究では、比較可能な会社様報を仕むする会社甘進の冬州を、会社甘進を取引の集合(ドメノ					
Abstract	本研究では、比較可能な会計情報を生成する会計基準の条件を、会計基準を取引の集合(ドメイ ン)から会計数値(コドメイン)へ対応させる関数とみて、検討をおこなった。 まず、先行研究から、その違成手段として論じられるキーワード「条件別続小」「無条件統一」 「画一性」「柔軟性」を取り上げ、これらの関係性について、国際私法分野の経済学的分析(加 賀見、2009)をペースに、具体的妥当性と情報処理コストの2つの評価軸を用いて整理を行った。 、情報経済学の観点からは、情報化される事象の分割が細かいほど詳細に比較できるため、具体 的妥当性の高い基準を、柔軟性をもって設定するのが望ましい。しかし、情報処理のコストまで 考慮にいれると、画一性も要求されることになる。後者のみを追求すれば無条件統一の基準に至 り、前者を認めることによって条件別統一が異見っれる。 いる数と下ASBによるリース会計の共同プロジェクトは、すべてのリースをオンバランスするとい う無条件統一の基準作りを目指したが、費用の測定を巡っては状を分かち、結果として条件別統 一基準となった。その理由と、比較可能性の程度に与える影響を検討した。両者で想定されるリ ース取引すなわち、ドメインガ算なっていたのであれば、異なる基準によって見体的契当性が構 保され、比較可能性が高まると言える。一方、各基準の利用者にとって情報処理コストが異なっていたからダイバージしたのであれば、結果として比較可能性は低下するだろう。 以上から、比較可能性の向上といったときに重要なのは、会計基準の利用者にとってで描済事象がどのよう にprecieve されているかは、上述の2つの評価軸によって定まる。しかし、会計基準の利用者 とっての、情報処理のコスト負担及び具体的妥当性は、Sunder(2016)も指摘するようにア・プリ オリに明らかではない評価軸のすり合わせの過程であったといえる。 In this study, we examine the conditions for accounting standards to generate comparable accounting information by viewing accounting standards as a function that maps a set of transactions (domain) to accounting figures (codomain). First, from previous studies, we picked up the keywords "conditional unification," "unconditional unification," "uniformity," and "flexibility," which are discussed as means of achieving comparability. Then, based on economic analysis in the field of private international law (Kagami, 2009), the relationship between these keywords was examined using two evaluation axes: flexibility and information processing cost. From the viewpoint of information acountional unification," "uniformity," and "flexibility," which are discussed as means of achieving comparability. The interset of accounting by ABB and FASB aimed to create an unconditional uniformed s					
Notes						
Genre	Research Paper					
Genie	Research Paper					

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2021 年度 学事振興資金(個人研究)研究成果実績報告書

研究代表者	所属	商学部	職	名	教授	補助額	300 ()	(A) 千円		
	氏名	荒田 映子	氏名(英語)	Eiko Arata	而功故	500			
·····································										
会計情報の比較可能性に関するモデル分析										
研究課題(英訳)										
Analysis for comparability of Accounting Information										
1.研究成果実績の概要										
本研究では、比較可能な会計情報を生成する会計基準の条件を、会計基準を取引の集合(ドメイン)から会計数値(コドメイン)へ対応 させる関数とみて、検討をおこなった。 まず、先行研究から、その達成手段として論じられるキーワード「条件別統一」「無条件統一」「画一性」「柔軟性」を取り上げ、これらの 関係性について、国際私法分野の経済学的分析(加賀見、2009)をベースに、具体的妥当性と情報処理コストの2つの評価軸を用いて 整理を行った。情報経済学の観点からは、情報化される事象の分割が細かいほど詳細に比較できるため、具体的妥当性の高い基準 を、柔軟性をもって設定するのが望ましい。しかし、情報処理のコストまで考慮にいれると、画一性も要求されることになる。後者のみを 追求すれば無条件統一の基準に至り、前者を認めることによって条件別統一が実現される。 IASBとFASBによるリース会計の共同プロジェクトは、すべてのリースをオンバランスするという無条件統一の基準作りを目指したが、 費用の測定を巡っては袂を分かち、結果として条件別統一基準となった。その理由と、比較可能性の程度に与える影響を検討した。両 者で想定されるリース取引すなわち、ドメインが異なっていたのであれば、異なる基準によって具体的妥当性が確保され、比較可能性 が高まると言える。一方、各基準の利用者にとって情報処理コストが異なっていたからダイバージしたのであれば、結果として比較可能 性は低下するだろう。 以上から、比較可能性の向上といったときに重要なのは、会計基準の利用者にとっての潜在的な区別のあり方である perception であ ると結論づけた。ある法域の人々にとって経済事象がどのように perceive されているかは、上述の2つの評価軸によって定まる。しか し、会計基準の利用者にとっての、情報処理のコスト負担及び具体的妥当性は、Sunder (2016)も指摘するようにア・プリオリに明らかで はない。FASBとIASBによるリースの共同プロジェクトは、このア・プリオリには明らかではない評価軸のすり合わせの過程であったと いえる。										
2. 研究成果実績の概要(英訳)										
In this study, we examine the conditions for accounting standards to generate comparable accounting information by viewing accounting standards as a function that maps a set of transactions (domain) to accounting figures (codomain). First, from previous studies, we picked up the keywords "conditional unification," "unconditional unification," "uniformity," and "flexibility," which are discussed as means of achieving comparability. Then, based on economic analysis in the field of private international law (Kagami, 2009), the relationship between these keywords was examined using two evaluation axes: flexibility and information processing cost. From the viewpoint of information economics, it is desirable to set standards with flexibility, because the finer the division of informational events, the more detailed the comparison can be. However, when the cost of information processing is taken into account, uniformity is also required. Pursuing only the latter will lead to unconditional uniformity while allowing the former will realize uniformity by condition. The joint project on lease accounting by IASB and FASB aimed to create an unconditional uniformed standard that all leases should be on the same basis, but they parted company over the measurement of costs. This results that lease accounting internationally being conditionally uniform. The reasons for the differences and their impact on comparability are discussed. If the two standards were different in terms of the domain, i.e., the lease transactions contemplated by the two standards, the different standards would ensure flexibility and increase comparability. On the other hand, if they diverged because the cost of information processing was different for the users of each standard, the comparability would be reduced as a result. From the above, we conclude that what is important in improving comparability is the potential distinction for the users of accounting standards, i.e., perception. How economic events are perceived by people in a given jurisdiction										
 発表者 (著者・		発表課題名 (著書名・演題)			発表学術誌名	学術誌系 (著書発行年月	らうしてい うちょう うちょう うちょう しんしゅう うちょう いっぽう いっぽう しんしゅう しんしゅう うちょう しんしゅう しんしゅ しんしゅ	月 演 年月)		
、 <u>1 日</u> 荒田映子		コンバージェンスの条件~5 能性の観点から				2022 年 3 月				
荒田映子		コンバージェンスの条件~」 能性の観点から		會計		2022 年 5 月(予	→ 定)			